

白川静漢字教育賞 選考結果

福井県では、本県出身の白川静博士の功績にちなみ、特色ある漢字教育を実践している方や、漢字文化の普及や生涯学習の推進に貢献している方、ならびに漢字に親しむ小・中学生を全国から公募、表彰しています。今回、11都道府県から405点の応募があり、令和4年11月27日(日)、福井県立図書館において表彰式が行われました。

福井県教育庁生涯学習・文化財課 TEL 0776-20-0559 Mail syoubun@pref.fukui.lg.jp



選考委員 (敬称略)

棚橋 尚子 (奈良教育大学教育学部教授)
加藤 徹 (明治大学法学部教授)
後藤 文男 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所上席研究員)
伊与登志雄 (福井新聞社参与・特別編集委員)
津崎 史 (白川静博士長女)
豊北 欽一 (福井県教育長)

(小・中学生の部のみ)

牧田 菊子 (福井県中学校教育研究会国語部会長)
斎藤 瑞恵 (福井県小学校教育研究会国語部会長)

※令和4年10月、福井県庁にて
選考委員会を実施しました。

一般の部

一般の部 講評 (選考委員：加藤 徹氏)

白川静先生が他界されて今年で16年になります。しかし、白川先生のお名前は、ますます輝いています。先生のお名前を冠した「白川静漢字教育賞」は、早いもので第9回になりました。一般の部には、今年は県の内外から応募が11件あり、数は多くないものの、それぞれ熱意と創意工夫のこもった実践で、審査員一同、感銘を受けました。

一般の部は、今年度は4点を選ばせていただきました。1回目の応募で見事に受賞された方もいれば、何度も応募されたあとに受賞された方、僅差で受賞を逃された方もいらっしゃいます。私も審査員も、毎年の審査のたびに、応募者の皆様の報告を精読することで、勉強させていただいております。審査の仕方や評価の基準も、改良に努めております。

審査をして感じるのは、白川文字学を活用した漢字教育は、本当に可能性の幅が広い、ということです。毎年、皆様からの応募の実践を審査するたびに、なるほど、その手があったか、と驚きや発見があります。開拓途上や未発掘の実践も、まだまだ多いはず。皆様のご応募をお待ちしております。

最後に、すべての応募者の皆様に、お礼を申し上げます。ありがとうございました。



一般の部 最優秀賞

(講評：加藤 徹氏)



ハムー先生の オモシロ漢字教室

(白川文字学編・漢字あそび編)

福井県 南越前町立南条小学校校長
今村 公一氏

1 実践の概要

白川静先生や白川文字学について、数多くの講演を行い、県内外にその魅力を発信した。また、いろいろな自作のゲームやクイズを作り、漢字あそび大会を開催したり、ゲームの作り方に関する講座を行ったりした。他にも、ウォークラリーをしながら楽しく漢字を学べるような取組や、学校だよりや校内掲示板に漢字コーナーを設けるなどして、漢字の面白さを発信し続けている。

2 実践の内容

(1) 白川文字学編

白川文字学について学び、内容に興味をもち、白川静先生の生き方を知り、感銘を受け、その内容や魅力をできるだけ分かりやすいようにまとめ、自らが講師となって学校や公民館等で講演した。

(2) 漢字あそび編

古代文字を含めた漢字のゲームやクイズを作り、公共施設や学校等で、漢字あそび大会を開催した。また、ゲームの作り方に関する内容について、教員や子ども、親子対象等に講座を開催した。こうした取組の内容をまとめ、『福井発オモシロ漢字教室』として全国出版した。

他にも、校舎内をまわりながら楽しく漢字を学べるような取組や、今年の一文字や干支に関する掲示、学校だよりや校内掲示板に漢字コーナーを設けるなどした。



3 実践の成果

学校での漢字学習は、新出漢字を「見て、書いて、覚える」という単調な学習の繰り返しになりがちで、漢字嫌いな者を作ることもあった。しかしながら、漢字の成り立ちを知り、漢字どうしのつながりを理解することや、クイズやゲームの要素を取り入れ、年齢層に応じた漢字に慣れ親しむ方法をとることは、知的好奇心を刺激し、学びに向かう意欲を高めるためにも、大変効果的であった。

大人も子どもも「楽しみながら遊んでやろう」、これがまさしく漢字力向上の秘訣である。

講評 子どもたちの知的な関心を高めるため、クイズやゲームを通じて自然に漢字への興味・関心を高め、白川文字学を活用して楽しく漢字を学習する方法が開発されている。今村氏は長年、白川文字学による漢字学習の普及に多大の貢献をなされてきた方であり、本実践でも、今村氏が福井県教育庁で「白川文字学」関連講座の講師をつとめていたころに獲得された知見や、児童・生徒に白川文字学を興味深く学ばせる手法や読物を開発してきた経験が、縦横に活かされている。

一般の部 優秀賞

(講評：加藤 徹 氏)



白川文字学を取り入れた 書道教育・制作・論考

埼玉県 埼玉県立春日部女子高等学校教諭
深田 邦明 氏

1 はじめに

私は大学時代に中村伸夫氏(筑波大学名誉教授・日展会員)から白川文字学を学んだ。篆書、特に金文の学習における字源調べの意義は、字形・点画の本来の意味を理解し、筆で書く際の留意点を自ら知ることである。例えば、「立」は『字統』に「大と一とに従う。一はその立つところの位置を示す。」とあるから金文の「立」の下の横画は真つづくに水平に書くべきと分かる。

2 実践の内容

(1) 高等学校における字源調べを取り入れた書道の授業について

私は授業では専門書である『字統』で字源を調べ、生徒に説明してきたが、生徒にとっては受け身の感があった。「生徒自ら字源を調べる主体的な学習」を可能にしたのが生徒向けの『常用字解』(2003年)と『人名字解』(2006年)である。私はこれらによる字源調べを書道教育にいち早く取り入れ、2008～10年度に埼玉県立越谷西高等学校において授業研究を行い、2009、2011年の全日本高等学校書道教育



研究会で発表した。高等学校の書道教育において、「生徒が字源を調べることで篆書の字形・点画の意味を理解でき、臨書・創作の際に字形・点画の面で正しく書け、意欲的に取り組める」ことを実証したことは大きな成果と言える。

(2) 字源調べを取り入れた自らの書作品制作や書道論考について

私自身の制作でも常に『字統』で字源を調べ、字形・点画に誤りがなく、かつ創意工夫した書作品を心掛け、日展(2022年まで入選8回)等の大規模展覧会で発表してきた。書道史研究では、昭和の大家、西川寧による金文を素材とした書作品について、白川の字源、金文の釈字・訓読・書風を取り入れ研究し、書道専門誌『墨』に発表した(「西川寧による金文を素材とした書作品について」2011年、第3回「墨」評論賞準大賞受賞、「筑波大学蔵西川寧臨庚嬴卣銘について」2011年)。



3 おわりに

白川文字学を国語の漢字教育で取り入れた例は多い。しかし、私は、白川文字学を書道教育・制作・論考の多方面においてこれだけ生かした例はこれまでにないと思信している。現在は、「白川文字学を取り入れた書道の書体の学習」について考えている。

講評 高校における書道教育で白川文字学を活用した実践である。生徒の学習意欲を醸成し、白川文字学を活用する面白さを体験させるという工夫は見事であり、その結果生まれた作品もすばらしい。その成果は全国レベルの教育研究会において発表され、広く共有された。継続性、汎用性、白川文字学の普及への貢献度など、どれをとっても優秀な実践である。

一般の部 特別奨励賞

(講評：加藤 徹 氏)



『日中2か国語詩吟』の実践

福井県 永平寺親禅の宿 柏樹閣
禅コンシェルジュ
杉本 紀幸 氏



漢詩は、漢字文化の一つとして親しまれてきたが、学校教育・詩吟・漢詩創作等で、平仄や押韻等の漢詩の規則は知識として実際に感じ取れないものとされている。また、漢詩吟詠では、漢字音直読も愛好されてきたが、日清戦争以降、敵性文化と退けられた一方、漢文訓読で悲歌慷慨し愛国主義に訴えるものが多い詩吟は文化芸術活動として生き残っている。平仄や押韻を新しい吟詠で表現したい。直読吟詠に存在した悲歌慷慨型だけでなく吟詠を認知させたい。こうした思いで、『日中2か国語詩吟』の作品を Web 上に発表してきた。

音声面の旋律は詩の内容と漢字の声調に沿った中国の伝承吟詠のものを主とし、その旋律にあう伴奏をつける。構成は、その旋律による中国語および日本語漢字音での吟詠と、その伴奏上での漢文訓読歌詞での歌唱としてきた。現代中国歌曲は声調無視の音楽優先であるが、伝承音楽等では各漢字の声調に沿った旋律で歌われてきた。中国語吟詠と同じ旋律で中国語中古音を留め入声字を識別できる日本語漢字音による吟詠を行うことで、日本詩吟では感じ得ない平仄配置が生み出すリズムと旋律のおもしろみを体感できる。逆に、入声音が消失した現代中国吟詠教育では、入声字の歌い方を「短く急に止める」と指導しているが、更に強調して喉内入声字韻尾にはk、舌内入声字韻尾にはt、唇内入声字韻尾にはpを加えて歌うことで、現代中国語でも入声を体感できる。

映像面では、平仄・入声・押韻等を色分けした歌詞表示や現代中国語の声調の動きにあわせた旋律となっていることを示す五線譜等によって、音声面での体感を補助している。

講評 インターネットという現代的な媒体を活用し、中国語の声調をメロディーに活かした詩吟を採譜・編曲して日中両国語で歌う、という画期的かつ国際的なコンセプトの実践である。狭義の「漢字教育」からはやはりはずれるかもしれないが、「漢字文化の普及」の観点から特別奨励賞をさしあげたい。



YouTube 漢字教室

—学校に行けなくても学べる環境を—

東京都 会社員
植木 ゆりこ 氏



さまざまな理由で学校で学ぶことができない子供達がいる。そして、ウイルスが出現し突然学校が休みになることもある。学習意欲はあるが「学校に行けない」「学校に行きたくない」子供達はどのようにして学べばよいのだろうか。「学校に行かなくても」学べる環境を用意しておかなくてはならない時代になっている。

2年半前、コロナで自宅待機中の新小学1年生向けにYouTube配信を始め、これまでに115本配信した。学校や学習塾から配信された低学年向けの動画もあったが、どれも真面目一辺倒で笑顔がなく、硬いものだった。

私は気軽に視聴できて、元気で笑顔と学びの「きっかけ」を子供達に届ける内容と構成を目指した。①子ども向けオリジナルキャラクターの登場 ②1動画1漢字 ③1動画5～10分 ④1～2週間に1動画のアップ ⑤オリジナル漢字カードを用いた成り立ちの説明 ⑥複数の成り立ちの紹介 ⑦低学年向けに顔出し ⑧笑顔で話しかける、などを工夫した。

「YouTuber?!」と揶揄されることもあったが、私は「学校に行けない」子供達のためのボランティアの漢字教育活動に、子供達が親しみやすいツールとしてYouTubeを採用したに過ぎない。

登録者は現在4～5クラス分の170名となった。学校に行けなくても学習意欲を持続させられる「次のツールはなんだろう?」と日々試行錯誤している。



講評 それぞれの動画は、視聴者である子どもたちや保護者に配慮し、きめ細かく作り込まれている。コロナ収束後も、世の中で授業や講座のオンライン化の動きは止まることはないと考えられる。今後、更にどのような進展を見せてくれるか、期待したい。

小・中学生の部 講評

自由部門 (選考委員：牧田 菊子氏)

自由部門には二百二十八点の応募がありました。自由部門は、白川静博士や漢字をテーマに、自由な発想で創作した作品を、考えたことや工夫した点などの解説を添えて応募する部門です。

漢字を一つの窓として、自分の生活や生き方を見つめ直し、考えたこと等をストーリーとして、率直に、楽しみながら、工夫して発信している作品に多く出会えた印象があります。それぞれの豊かな感性にとても心動かされました。今後の取組も楽しみにしています。

漢字川柳部門 (選考委員：斎藤 瑞恵氏)

漢字川柳部門には百四十二点の応募がありました。川柳は、漢字の成り立ちに関するものというところで、小中学生のみなさんは、まず成り立ちを調べ、そこから想像をふくらませて五・七・五の川柳に表現していました。

どの作品も、漢字との対話により、遠く時代は離れていても古人が思い巡らせた情景や心情と同じものを見て、豊かに連想し、自分の言葉で生き生きと表現していました。

次年度も、漢字を通して想像の翼を広げ、楽しみながら川柳作りに取り組んでほしいと思います。

漢字作文部門 (選考委員：斎藤 瑞恵氏)

漢字作文部門には二十四点の応募がありました。漢字にちなんだ四百字までの自由作文で、名前についでのエピソードや印象に残った漢字についての作品が寄せられました。

どの作品も、はじめはその漢字に対する興味関心から始まっていますが、その漢字を掘り下げていくことで、様々な感情がわき上がり、愛着をもって捉えていることが伺えました。

来年も自分の身の回りや体験と漢字を結びつけ、漢字に対する思い入れを感じる作文が出品されることを期待しています。

小・中学生の部 優秀賞 自由部門

(講評：牧田 菊子氏)

輝かしい人生

福井県 福井県立高志中学校二年 吉田 悠華さん



講評 吉田悠華さんの作品は、伸びやかで美しい筆致から、これからの人生に寄せる作者の期待感が、「輝」という字の意味や書に対する愛着と共に伝わってくる清々しい作品です。鮮やかな色使いで、見る人の心も元気になります。

「懐」で伝わるひいおばあちゃんの思い

福井県 福井市東藤島小学校六年 秦 涼羽さん



講評 秦涼羽さんの作品からは、目と涙の部分が本当に悲しそうで、亡くなったひいおばあちゃんをしのぶ気持ちが伝わって来ました。漢字の成り立ちを自分の経験に引き寄せてとらえ、文字で表現していることに心打られました。

私の好きな事

福井県 福井市東藤島小学校六年 舟木 桜さん



講評 舟木桜さんの作品は、「古代の子」ともたちも自分たちと同じように、はしゃいで楽しく遊んでいたのだろう」と、時間や空間を飛び越えて古代人と対話しているような作品です。勢いのある線と明るい色彩も素敵です。

昔の漢字の月めくり

兵庫県 神戸市立明親小学校五年 山根 妃稀さん



講評 山根妃稀さんは、この作品を制作しながら「巡る季節の中で古代の人々はどんな生活をして、何を感じていたのだろう」と、古代人に思いを馳せていたのではないかと思います。漢字への深い探究心を感じました。



小・中学生の部 優秀賞 漢字川柳部門

(講評：斎藤 瑞恵 氏)

「郷」

おおうたげ ごちそうかこむ むらなかま
大宴 ごちそうかこむ 村仲間

【成り立ち】「ごちそう」の入った器をばさんで人が座り、祭りの後の宴を
をしている様子から

参考文献：『白川静文字学に学ぶ 漢字のなりたちブック6年生』

千葉県 いすみ市立岬中学校三年

久我 怜生さん

【講評】久我怜生さんは「郷」の成り立ちを的確に捉えて川柳にしてみました。たくさんの仲間とごちそうを囲んで楽しく語り合うにぎやかな情景が目につかぶようです。「コナガ」も早く終息し、こんなふう仲間と楽しく会食したいという思いさえ感じさせる作品です。

「風」

りゅうがきた かぜとたわむれ とりがとぶ
龍が来た 風と戯れ 鳥が飛ぶ

【成り立ち】風は龍のような姿のものが起すもの、神聖な鳥・鳳凰から風になった等と言われているから

参考文献：『OK辞典：漢字／漢和／語源辞典』
<https://www.okjiten.jp/index.html>

千葉県 いすみ市立岬中学校三年

高野 波来さん

【講評】高野波来さんの作品を読むと、大空に龍がうねっている姿や鳥が舞っている姿が浮かんできます。「風と戯れている」という表現も味わい深く、スケールの大きい作品です。

「友」

じゃあまたね かさねたてとて ねがいこめ
じゃあまたね 重ねた手と手 願いこめ

【成り立ち】かばうように曲げた手を二つ合わせた字で、仲良くかばい合う仲間という意味から

参考文献：『小学館例解学習漢字辞典』

栃木県 小山市立小山城南小学校五年

隈本 香凜さん

【講評】隈本香凜さんは、「友」という漢字を取り上げました。お互いに別れを惜しみ、また次の出会いを求める、友とはそんなものでしょう。「友」を、手を二つ合わせた様子と捉えた古人の感性と重ね、友との別れ際に思いを巡らせた点にセンスを感じました。

「愛」

こころひかれ ふりむいたんだ それがあい
心ひかれ ふりむいたんだ それが愛

【成り立ち】後ろを振り返って立っている人の姿を、立ち去ろうとしながらもそこに心惹かれる気持ちから

参考文献：『白川静文字学に学ぶ 漢字のなりたちブック4年生』

京都府 立命館小学校四年

山本 拓海さん

【講評】山本拓海さんの作品は、友人や家族などと別れた後に、振り返って相手の後ろ姿を見る姿が情景としてよく伝わり、まさしくそこに愛があると感じさせる作品です。

小・中学生の部 優秀賞 漢字作文部門

(講評：斎藤 瑞恵 氏)

自分を極める

千葉県 いすみ市立岬中学校三年

波多野 己沙さん

テーマは漢字。例えば自分の漢字についてのエピソードと聞いたので、私が自分の名前を好きになったきっかけについて書きたい。

自分の名前について母に尋ねたことがあった。「己沙の「己」をなぜ希望の「希」や輝への「輝」などにならなかったのか」と。別に不満があった訳ではないが、一般にあまり使わない漢字だと思ったのだ。母の答えはこうだった。「己沙の「己」は自分。「沙」は砂の意味。砂は岩が水の流れに乗り、長い時間をかけて磨かれて磨かれてたどりの着く形。つまり、「己沙は自分を極める」という意味。

私が母にこの話をしてもらったのは、確か小学校五年生くらいに頃だったと思う。このことがあってから、私はその前までよりずっと勉強や運動を頑張るようになった気がする。母に直接言うのは恥ずかしくて無理だが、文でなら言える気がする。

この名前をくれてありがとう。気に入っているよ。

【講評】波多野己沙さんの作品は、自分の名前の由来や漢字の成り立ちを知ることによって、自分の名前が両親からの初めての大きなプレゼントだと知った喜びと、名前のように「自分を極めよう」という強い思いをもったことが素直に伝わってくる作品です。

わたしの母の名前

栃木県 小山市立小山城南小学校五年

松浦 來那さん

わたしの母の名前は「しゅく」です。漢字で書くと、「淑」と書きます。同じ名前の人を、一人だけ本で見た事があるのですが、ほとんど聞いた事がありません。母は、子どものころは、名前の事だからかわれた事があるけれど、音のひびきやこの字が好きなのでとても気に入っていると言っています。

母の名前を考えた祖父に、なぜこの名前になったのかをたずねてみたら少しだけ照れくさそうでした。でも、母の小さいころのアルバムを見ると、そこには「水が清い」と由来が書かれていました。

たれの名前にも必ず意味や想いがこめられているものなのだなぁと思いました。わたしも自分の名前を好きになる日がくるといいなぁ。

【講評】松浦來那さんの作品は、家族それぞれの人や関係性が伝わってくる温かい作品です。気に入っていた母の名前の由来が昔のアルバムからわかり、作者はそこに祖父のあふれる思いを感じます。たった四百字の作文の中に、ドラマを感じました。